

巻頭言 入会や共同体を研究することの今日的意味

岡田秀二（岩手大学教授）

「東日本入会・山村研究会」は、2009年8月に第1回の研究会を開催した。2013年8月の研究大会で5回目を迎える。この間、統一テーマとして『山村の未来像―「入会」の可能性を考える―』を掲げ、ひとつは、現実的・今日的入会的関係の実態報告、もうひとつは、理論的・学術的側面に係わる報告、の2つの報告を設定し、参加者からの自由な発想に基づく質問・意見交換を大事に、報告者の意図するところ・主張を吸収しながら、各自の研究進展に寄与し、また地域の問題解決と施策化に寄与することを狙いとしてきた。

2013年の研究会では、報告の構成はこれまで通りに行うが、議論としては過去5年間の研究大会全体にも係わるような総合的・総括的性格を持つことを期待している。そのためにも、なぜ5年間統一テーマとして『山村の未来像―「入会」の可能性を考える』を掲げてきたのかについて改めて触れてみたい。

基本的なこととしてまずは次の点を挙げなければならない。それは、グローバル段階にまで行き着いた物やサービス、人、労働力、土地等あらゆるものへの市場論理の支配的状況によって、個人も地域も国民経済も、その持続性について展望の持てない状況に立ち至っていること、危機状況にあることから、立場や思想を超えて共同性、コミュニティ、アソシエーション等に打開の方向性を見いだすようになってきていることである。そこでは共同性や共同体、資源と係わっては入会、といったかつて近代化にとっては解体すべき対象が今や積極面に位置づき評価されるようになってきているのである。

実は、共同体や共同性、「むら論」、入会慣行等については、戦後を見ても大方の消極的評価の一方で、その必要性・不可欠性について主張する人々やグループは、時代を特徴づけるような形で存在していたわけだが、それらには次のような点から問題も指摘されていた。それは、たとえば「むら論」や「新農本主義」と言われるような人々は、農民の心情に寄りすぎ、情念的要素が付きまとって、一般化・理論化への展開を見いだせずにいた。また、「地域主義」等の主張については分権の主張に特徴的であるように社会構造的で、ここでは逆に「地域」で暮らしている人々との接点を持たずにいた。勿論両者ともに、近代が生み出した理念や思想、価値観への疑問を提示し、生態学への関心を引き起こし、近代を乗り越えようとの価値多様化の一環に位置づいていたことは間違いない。

今日のわれわれが問い、研究し、提案すべき共同性や共同体、あるいはその論理として重要な入会、そしてその仕組みや範囲は、農民や農村に閉じ込めるのでもなく、そうかと言って理念や学問レベルに閉じこめるのでもなく、さらには、近代的、一元的価値に基づく社会を告発することで満足するのでもない。現場に即して具体的に、それでいて理論的でもあり、そして何より相互的で、次の時代を彫塑し刻んでいくものでなければと思うのである。これがまた、性格の異なる2つの報告を毎回用意した理由でもある。